

後、依頼により書き、最後には『異邦人の神道論』として公刊する(白帝社、昭和49年)。

扱て、先生に特に親しく接触し出した時点は定かではない。学生時代宗教学の講義受講がチャンスであった。小石川駕籠町の明治聖徳記念学会の事務所にお手伝いに出掛けた。当時東大助手溝口駒三氏、松下松平氏が務めておられた。松下氏は目下も健在で、旧事大成経の発刊に戦前にも増して努力せられている奇篤な学者の一人(國大神道部の卒業生)。

猶、一言加えておく。占領軍の当初の神道神社(國家神道)観は、ホルトムの著書であることは、軍が日本についてのガイド文の中の一冊にホルトムの神道論が含まれている点からも云える。

余談になるが、敗戦後、神社に対して占領軍は極めて、片手落ちの処置をとる、信教の自由は神社に限っては守られていない。

日光東照宮古川左京宮司はこの点をよみとり、小生を呼び、当時の神祇院の幹部諸君を明治神宮の絵画館の一

室でホルトムの神道観を話すよう乞われて、彼の神道論を陳べたことがある。

後日、先生の依頼で小野祖教氏と連立って横須賀基地に勤務のホルトム氏の子息に会って様子をきいたが判然とはしなかった。

加藤玄智先生の思い出

本学会理事
明治神宮権宮司 副島廣之

もう五十年以上も昔のことだから、國學院の神道部でどんな授業を受けたのか、すべて遠い記憶の中にあつて定かではない。和服をつけて登校した祭式、野外演習に出かけた教練などは思い出も深い。一般の学科では折口信夫、武田祐吉両先生の講義の御様子などが目に浮ぶ。そうした中で、どうしたわけか私は加藤玄智先生の宗教学に興味をひかれ、我ながら熱心に聴講したことを

思い出す。神人同格教とか神人懸隔教とか、唯一神教とか汎神教とか、授業のテキストとして使われた先生の著『神道の宗教学的な新研究』を取り出してみると、いろいろ書込みがしてあって懐しく当時が思いおこされる。

國學院を出てから私はすぐ熊野那智神社に奉職した。

中世の熊野信仰の名残りもあって、靈現いやちこな神社で地方の人々の信仰を集めており、又境内の那智御滝飛滝神社には一般の観光客も多かった。その頃先生には御夫妻で熊野に御旅行なされ、那智神社に参拝された折、御一緒にカメラにおさまつた写真が今もなお私のアルバムに残っている。

その頃私は、先生の御依頼があつたかどうか、飛滝神社の御神体として崇められる那智御滝や、巨樟の空洞の中に祀られている大阪住吉神社境内の楠栞神社などの資料をお送りした。先生が名著『神道の宗教発達の史的研究』を執筆しておられた頃で、程なく出版された一冊をわざわざ私にお送り下さった。拝見すると差上げた資料がいくつか掲載されており、又御丁寧にも序言に私の名

前まで挙げてその旨をお書き下さっており、先生の御懇篤なお人柄にただただ恐縮するばかりであった。

その後私は大阪の坐摩神社に転勤し、又戦前の風雲急な時代ともなつて、先生にもつい御無沙汰勝ちになつてしまつた事は、誠に申訳ない次第である。戦後も神宮外苑の管理や戦災復興の事業にたずさわり、仕事の関係もあつて自然、御晩年の先生に接する機会を失つた事は返すがえすも申訳なく、又残念なことに思っている。先年世界宗教会議等のことに係つて、いささか世界の諸宗教と接触する機会があり、その節改めて加藤先生の御著書を拝見し勉強させて頂いたりもして、今以て先生の学恩を有りがたく頂いている次第である。

加藤玄智博士の想い出

本学会理事
皇學館大學教授

鎌田純一